Okinawa Prefectural University of Arts

「田島本おもろさうし」解題

齊藤　郁子

研究史の上では「伊波普猷の師」として有名な田島利三郎が沖縄へ渡ったのは、一八九三（明治二六）年、二三歳の時のことである。それからの約五年間、彼は琉球文学研究の基礎的な作業に没頭することになるのである。

そもそも、彼が沖縄へやって来たのは、「五十巻ばかりの琉球語もて記されたる文書あり、而かも、今は如何なることを記載せるものなるかをだに、詳にする者なしといふことを聞きたり。」[1]と、存在を誇張されて伝えられた「おもろさうし」を解読するのが目的だったようである。しかし沖縄に来てもしばらくはその「五十巻ばかりの琉球語もて記されたる文書」についての情報が得られなかったらしいが、小橋川朝昇編「琉球大歌集」の凡例に「一神歌ハ御唄（オモロ）ナリ云々」とあるのをみて「オモロ」の存在を知る。後に沖縄県庁編集の「琉球史料」の「おもろさうし」を閲覧し、これが「五十巻ばかりの琉球語もて記されたる文書」だと分かるのである。[2]それが彼の「おもろさうし」研究の始まりであった。

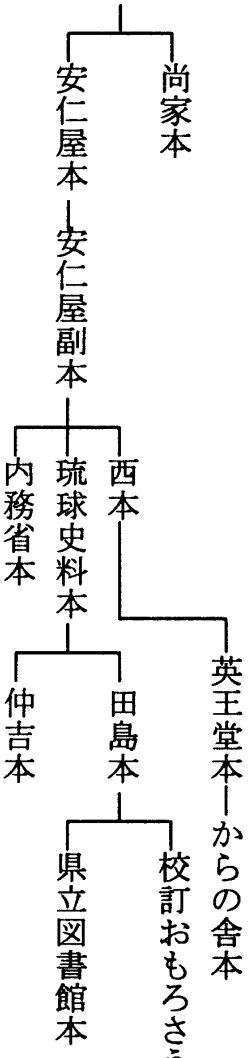
1．「田島本おもろさうし」

（一）系統について

田島が筆写した「おもろさうし」は「田島本おもろさうし」（以下「田島本」と記す）と言われ（ただし田島本人はこの書名を「オモロ双紙」「オモロ御さうし」と表記している[3]）、これについてはすでに系統、特徴などについて多く述べられているが、ここでも少し触れておきたい。

「おもろさうし」は「尚家本」系統と「安仁屋本」系統とに大きく分けられる。そして安仁屋本の系統から多くの子本・孫本が筆写されていった。田島本も安仁屋本の系統に属する。

『おもろさうし』諸本系統略図



NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

田島は琉球史料本から謄写したのち、安仁屋正・副本と校合を行い、その結果の異同を記入している。また、巻末に「明治廿八年五月十七日初校了」「廿九年十二月十五日　旧おもろ主取家安仁屋家ノ二本ニ依テ校合　／一ハ　むかしからの本／一ハ　廃藩後かきあらためしもの」とあり、田島による筆写・校合年月日がわかる。

（二）田島本の記載スタイル

田島本は安仁屋本系統ではあるのだが、その記載スタイルは同系統の他本とも、尚家本とも大きく異なっている。

田島本本文は原則として「一」、「又」という符号を頭にした一行書きになっており、一行で書ききれない場合は行を変えている。このスタイルは、オモロが「一」「又」の符号でくぎられる部分が小さなひとまとまりであり、これらが展開していって一首のオモロを構成すると田島が考えたことを表すものであろうが、結果的に親本の記載形式をわからなくしてしまった。

だが、一行書きにはしていても区切り点のほかに文字と文字の間をあきらかに空けている部分が田島本に見られる。これを同じ琉球史料本から筆写した仲吉本と付き合わせてみると、この空白部分は仲吉本で行変えをしているところとほぼ一致する。ただし、仲吉本で行変えをしていても区切り点が打たれている場合は田島本では空白を設けていない。また、仲吉本で行変えをしていても田島本で空白を空けていない部分もあるのではあるが、明らかに田島本で空白とわかる部分に関しては、仲吉本の同じ部分で行変えをしているという傾向がみられる。

このように田島は独自のスタイルで筆写してはいるものの、ある程度、元の形がわかるような配慮はしていたことがわかるのである。

また、記載スタイルについては伊波普猷も田島本の影響を受けていた形跡が見られる。

例を挙げると、田島本の巻十――2（通巻番号512　以下同）の第一節は次のように記載されている。

一　むかし、はぢまりや、てたこ、ア大ぬしや、きよらや、てりよわれ

伊波普猷のごく初期の著書である『古琉球』収載の「オモロ七種」にある巻十――2のオモロの記載スタイルは、「一、又」記号がないものの次のようになっている。

むかし　はぢまり　や　てだこ　大ぬしや

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

きよらや　てりよわれ

このスタイルは田島本とかなり近い。このスタイルは、明治四〇年発行の初版から大正十一年発行の第三版まで同じである。なお、ほかに引用されたオモロも田島本とよく似たスタイルである。しかし、同じオモロを『校訂おもろさうし』（大正十四年発行）では、

一　むかし、はぢまりや、
てだこ、ア大ぬしや、
きよらや、てりよわれ

としており、伊波普猷独自のスタイルとなっている。そしてこの『校訂おもろさうし』が出たあと、昭和十七年に『古琉球』第四版が出るのであるが、この第四版では『校訂おもろさうし』と同じスタイルに変えられている。

『校訂おもろさうし』出版の作業にかかるまでは、伊波がすぐに見ることができたのは田島本であったであろうから、おのずと田島本からの影響を受けていたのであろう。やがて伊波は『校訂おもろさうし』出版の作業のため尚家本や仲吉本、安仁屋本といった他本を参照したのち伊波独自の記載スタイルを確立していくことになったのではないだろうか。

（三）田島本にみられる注記

そのほかの田島本の大きな特色の一つに、現在行方不明である安仁屋本・安仁屋副本の内容が推測できることが挙げられる。

田島は安仁屋本との校合結果を丹念に注記しており、「ア　と記セシハ旧主取安仁屋ノ本ノ略符」のように、自らが筆写した底本である琉球史料本には無く、安仁屋本によって補った濁点や文字の右肩に「ア」と小さく注記しているものが数多く見られる。

また、「種等の例」というのがあり、これは仲吉本にも見られる。田島本には「種等の例　トハ例ニタガヘ朱ニテセズ　ウス墨ニテ註ヲ加ヘシモノニ云フ」と説明がある。なお、巻一―20の「ちよらの、」という語の右に見られる「種等也」という注記の右に線を延ばして「アニモアレドウス墨ニテ例トタガヘリ決シテ後ニ書キ加ヘタル也」と補足的な書き込みをしている。

だが、残念ながら「種等」という語の詳しい意味はよくわからない。しかし、「種等の例」の注意書きに見えるように、注は基本的には朱書きで入れられていて、その例と異なり薄墨で入れられた注があったということがわかるのである。なお、田島本でも、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

いわゆる「原注」とみなされる部分の多くは茶色である。これはおそらく田島も「原注」の部分は墨とは異なる色で書き入れたためであろうと考えられるのだが、現在ではその使用インク（？）が何であったか確定はできないため、今回の翻刻では書体を変える等の区別はしなかった。

ほかに、注意を要する「モ」という注記もある。これは「モ　註釈セシウチニモノカナヲ冠セシハ原本ニモトヨリ有リシコトヲ示ス略符也」と田島本で説明されていて、伊波普猷の『校訂おもろさうし』にも引き継がれる注記である。[4] この「原本」とは、素直に考えれば田島が最初に写した琉球史料本ということになろうが、もし琉球史料本にあった注記だとすれば「ア」の注以外のものにはすべて「モ」が付けられていなければおかしいのだが、実際は何も付されていない注記もある。もしかしたらこの「モ」の注記は安仁屋本にすでに付されていた注記なのかもしれないが、現在行方不明である安仁屋本が実際にどのような形で書かれていたのかはわからない。この点は安仁屋本の発見を待たなければ解明できないところであろう。

そのほか、田島が備忘のため書き込んだ注記も数多く残されている。その中には、たとえば語句の解釈の手がかりとして『混効験集』からの引用や他の文献から引用したものがある。例を上げると、巻一―22に「大君きや、いろのべに、なしよわちへ、きみしなて、なよらに・・」という詞句がある。その右下部に「那覇由来記」の「伊呂農辺仁御蔵」の記述を引用している「いろのべに」についての参考記事である。このような注記にみられる数多い書名には、田島の琉球文学研究の資料集めと読解への熱意が表れている。

2．田島利三郎の「おもろさうし」研究

ほかの注記としてはオモロの巻別番号を付したものもあるが、表題の次頁に、表題の項目に対応するオモロ数のメモも残している。例えば巻二「中城越来のおもろ　首里王府のおさうし」の場合、「1　中くすく　29／5ゥ越来　17」となっており、巻三「きこゑ大きみかおもろ御さうし」では、「きこゑ大君かおもろ64」とある（ただし、巻一のみ表題の「きこゑ大きみかおもろ」の下に41と数字が見える）。これは数量を把握しようとする田島の注記の特徴といえよう。また、全巻の目録の最後に「共弐拾弐冊／総歌数千五百五十一首也　廿九年十二月廿九日調」とあり、田島が「おもろさうし」全巻の歌数を一五五一と数えていたことを示す。ちなみに、現在の研究による全巻の歌数は一五五四首とされている。

そのほか、語彙に関する田島の書き入れの中に興味深いものがある。

巻一―27のオモロまでは語の左側に傍線が付されていることが多い。傍線はだいたい区切り点ごとに付されているのだが、この書き入れから、研究の進行を推測できる部分が見られるのである。

例を挙げると、巻一―21の第一節は「一　きこへ大きみきや　しまうちとみ、おしうけて、かくらのて、よりとみる、かに、あ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

る」であり、これもやはり区切り点ごとに左側に傍線がある。そしてその下部には「てよりとみ、る、かにある　ナラン」と注記がされている。これからすると、田島は最初、区切り点は意味の切れ目と考えていたようであるが、しだいに、区切り点は必ずしも意味の切れ目とは言えないものであり、これにこだわりすぎずに語意を解釈したほうがよい場合もあると認識が変わっていったことが分かる。

さらに、田島によるオモロの解釈も見られる。一首全体を解釈しているものは数としては少ないが、オモロ研究初期の解釈として注目に値するであろう。

そのほか、田島の功績とされるのは、オモロの重複を指摘したことである。しかしこれに関して島村幸一氏は、田島の研究水準を高く評価しながらも、重複の指示の不備や「重複」と「参照」の区別のあいまいさを指摘している[5]。

このオモロの重複に関しては、田島自身も「歌数総べて千五百五十一首。重出せるものあれど、猶千二三百首を下らざるべし。」と述べている[6]。これによると、田島も約二百～三百のオモロを「重出」とみなすという、緩い「重複」の概念をもっていたということがわかる。

しかし、田島本を見ると、各巻ごとのオモロ番号、いわゆる「重複」とみなされるオモロの番号、そしてその重複オモロの語句と比較して、異なる場合を細かく丹念に朱で書き入れしている。オモロの上部に、そのオモロと似ている別のオモロの番号を書いてはいても、それぞれのオモロ間の異同をも細かく注記しているのである。

この、オモロ間の異同に関する田島の注記の詳しさは、「似ている」オモロであっても、完全に同じではないのだという、田島自身の克明なメモである。

波照間永吉氏の「重複オモロの実相」、「重複オモロの考察――『重複』の実態と『重複』概念の提示――」[7]は、「重複」とされるオモロを校合してその異同を明らかにし、初めて「重複」のレベルを「完全重複」「重複」「類歌」「参考歌」「非重複」に整理・分類して、オモロの「重複」についての「試論」を提出した労作である。しかし、田島も、「重複」のレベルを概念としてまとめてはいないが、波照間氏の仕事と非常に近い精密さで各「重複」オモロを見ていたということができる。

そのほか、田島本の注記の中ではオモロ語と当時の琉球語との比較があるが、巻十――26(536)の下部にある「くれハ（時雨）シクレノクレカ」というような、オモロ語と日本古語との比較とみられる注記もある。ただし、語によっては、日本古語との比較も妥当ではない場合もある。

日本語と琉球語は祖を同じくするというのが現在の言語学的通説であり、解釈の困難な語を日本古語に遡って類推するという方法がとられる。それと同じ方法論で田島利三郎はオモロ語を解釈しようとしていたことがわかるのである。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

一九九五年に発行された『沖縄古語大辞典』[8]によって、沖縄古語の解釈に一つの到達点が提示されたが、この辞典の各所に見られる、「日本古語と沖縄古語との比較、類推」という方法論と田島の拠った方法論とは通じるものがあると言うことができるのである。

この琉球語と日本古語との比較については伊波普猷も「私のところに、氏の『配流餘材』といふのがあるが、明治二十七年の十月十五日から着手したもので、万葉集中の古語と琉球語とを比較したものである。四巻までは出来上がつてゐるが、学者の参考になるものが多い。」[9]と田島の他のノートに残された研究メモについて言及している。

ほかに、田島のオモロ語の研究がうかがわれる記録としては「随庵随録」「受剣石」というノートがある。これらについては池宮正治氏[10]や、山下重一氏も概要に触れておられるが[11]、これに筆者が少々ノート内容の補足を試みると次のようになる。

「随庵随録」は語釈や場の所在地のメモのほかに「おもろさうし」で見られる用例（例えば「いのり　イベノ＝　ツカサ＝いのて　いのら」のような）が記されている。そしてこのノートの巻末近くには「1、琉球略史／2、信仰／3　おもろに対する観念、おもろ主取家／4　おもろの文法　修辞上の特徴／5　おもろ本文／6　おもろの文法（筆者注　この部分は線で消されている）／7　おもろの語釈及出所／8　おもろの語と現時の琉球語の比較／9　日本語と琉球語との比較／10　琉球開闢説及創世記論」というメモや、「序言／緒論　歴史　琉球の神といふ観念／おもろといふ名義／おもろの位地（ママ）」といったメモがあり、田島はこのような構想でオモロ研究を体系化しようとしたあとが見られるのである。

これを見ると、オモロを解するためには歴史、宗教、言語等の各分野の知識をもって総合的に考えなければならないという、今日にも通用する方法論で田島が臨んでいたことが分かる。ここに田島の先進性が表れているのである。

「受剣石」も「随庵随録」と同じような雑記ノートだが、「おもろさうし」で見られる用例はオモロ番号を書くのみでそれほど細かくはない。そしてオモロ語だけではなく他の文献（例えば『古事記』『万葉集』『祝詞』「宮古島旧史（ママ）」）に見られる語彙に関する記録・語釈とオタカベ、口説などの歌の記録が見られる。

そして田島のオモロ研究の成果として忘れてはならないのは、古琉球をオモロから照射し、新たな歴史観の可能性を示した「阿摩和利加那といへる名義」という小文[12]である。これは阿摩和利について、人民に慕われた様子がわかるオモロから弁護し、逆臣とされる彼の実像に迫ろうとしたものであった。このテーマはその後、伊波普猷が「阿麻和利考」[13]でさらに論考を深め、逆臣阿摩和利のイメージを改めるのに大きな力を持つにいたったことはよく知られている。田島のこの論考は「小文」ではあってもオモロを利用した具体的研究のあり方を示すもので、後続の研究者に大きな影響を与えた画期的なものであった。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

おわりに

以上「田島本おもろさうし」から、田島利三郎の研究および近代の琉球文学研究の初期段階の様相について見てきたわけだが、今一度、田島によるテキストクリティークの成果を押さえておきたい。「田島本おもろさうし」は刊行されたわけではないので、田島による多くの注記は人目に触れる機会がなかった。しかし、地道な校合作業の成果として、田島は「おもろさうし」を非常な精密さでみていたということができる。

無論、田島の研究にも限界はある。しかし、「限界」は「限界」としても、田島がすでに研究の方法論として、現在に通じる手法を用いていたこともまた特記しておきたい。

謝辞

この「田島本おもろさうし」を翻刻するにあたり、原資料からの翻刻許可及び閲覧に便宜を図っていただいた琉球大学附属図書館に感謝を申し上げる。

校正作業にあたっては、玉城伸子（沖縄県立芸術大学大学院民族芸術文化学専修助手）・西岡敏（日本学術振興会特別研究員）の両氏にご協力をいただいた。そして、本書の構想の段階から最終的なチェックまで懇切にご指導くださった波照間永吉沖縄県立芸術大学大学院芸術文化学研究科教授をはじめ、様々な面でご協力をいただき、「田島本おもろさうし」出版の機会を与えてくださった沖縄県立芸術大学附属研究所関係者の皆様に心より感謝申し上げる。

最後になったが、「ノート」の翻刻という困難な作業に最後まで根気強くお付き合いくださった株式会社アシストの皆様にも、記して深く感謝申し上げたい。

注

(1) 田島利三郎『琉球文学研究』「琉球語研究資料」第一書房（復刻版）一九八八年。
(2) 田島前掲書。
(3) 田島前掲書。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

(4) 伊波普猷校訂『校訂おもろさうし』南島談話会発行　郷土研究社発売　一九二五年　の「例言」で触れられている。
(5) 島村幸一「「重複オモロ」―諸本が指示する「重複オモロ」を中心に―」『沖縄文化』61号　沖縄文化協会　一九八三年。
(6) 田島前掲書。
(7) 波照間永吉「重複オモロの実相」『沖縄芸術の科学』8号　沖縄県立芸術大学附属研究所　一九九五年。「重複オモロの考察―『重複』の実態と『重複』概念の提示―」『沖縄文化研究』22　法政大学沖縄文化研究所　一九九六年。
(8) 沖縄古語大辞典編集委員会編『沖縄古語大辞典』角川書店　一九九五年。
(9) 伊波普猷校訂前掲書「序」。
(10) 池宮正治『琉球文学論の方法』三一書房　一九八二年。
(11) 田島前掲書。山下重一　解題。
(12) 田島前掲書。
(13) 伊波普猷『古琉球』沖縄公論社　一九一一年。

参考文献

・田島利三郎筆写「おもろさうし」琉球大学附属図書館伊波普猷文庫所蔵
・仲原善忠・外間守善編『校本おもろさうし』角川書店　一九六五年。
・外間守善『南島文学論』角川書店　一九九五年。

NII-Electronic Library Service